

がんばろう！日本！！ 10・10シンポジウム

抜本的な改革の政党とその支持基盤を、
どこからどのようにつくっていくのか

パネルディスカッション要旨

理念、政策から独自の支持基盤をつくり、
できあいの基盤に
理念、政策からの分岐をいれていく戦い

東 私九〇年の選挙で、旧公明党から出馬し、現在三回生です。

前歴は国連難民高等弁務官事務所勤務で仕事をし、日本の外交、安全保障政策を抜本的に変えなくてはならないと思いついて、政治界に入りました。

日本の政治というのは、どの政党が何を考え、何をやるかというのかというところが国民の前に明確に示されていない、そこに本質的な問題があるんだらうと思います。「和をもって尊しとす」という言葉に代表される通り、何を議論し、どこに立点があるのか、それがどのように現象化されているのかが全くわか



らない。

民主主義の原点の一つは、それぞれの意見をまず認め合うことだろーうと思います。その上で、それを戦わせていける政党を作り上げない限り、日本の二十一世紀における新しい政治というのは、開かれてこないんじゃないか。

明確な理念とその理念に基づく政策をどのように主張していくのか。それはとりもなおさず、自分たちの支持者のところまでちゃんとメスを入れない限り、今申しあげた理念、政策に基づく政党政治というものはなかなか作ることができないんじゃないか。

自立に基づく自己責任、これをどこまで推し進めていくことができるのかというところなんだろうと思っております。枝野 私の初当選は五年前の日本新党の一般公募の候補としてでした。まさに地盤、看板、カバンというものがまったくない状態で、そうした意味で従来の政治家と違う歩み方をすることができましたし、せざるをえなかった。

最初のうちは頼み事をしてくるような人もいましたが、一切お断りし続けて、要するに私がどういう政策を訴えているか、どういった活動をしているのかを見て、応援をしてやろうじゃないかと、まさに政策、理念で応援をいただけたら方に、一人ずつ集まってきていただけて、現在の状況に至っています。

そうした活動をしてきた立場から考えますと、なかなか時間がかかるなあ、というのが率直な印象です。

実は二回目の選挙では、労働組合からも応援していただけたようになりますが、ご理解いただけたのになかなかエネルギーを費やした。私を応援してくださっている皆さんは、労働組合の従来の選挙のパターンや組織論とは全く違った考え方でやってきていたに違いない。このコアの運動体の邪魔にならないようにやってくれ、かたはつきりとお願いをしして選挙を戦いました。

もしここで、労働組合の応援に甘えていたら、多分その前から何年かにわたって応援してくださった皆さんは、ちょっと違うんじゃないの、ということになつていたのではないのか。

私は今の日本の政治で必要なことは個々人が自立して、自己責任でものをまわしていくように変えなければならぬと思っております。その人間を支える政治基盤が、上からものを決めて、組織で動かしていくというやり方をするということは、自己矛盾になっていく、支持基盤と政策との矛盾が必ず生じてくると思うからです。

田中 私は市川市議、千葉県議を経て、平成五年の総選挙で、自民党では変えられないの思いから（当時、千葉県の自民党青年局長、自民党を離党し、さきがけに参加しました。それまでの選挙は昭和二十二年から県会議員を務めておりました祖父の地盤を耕すということでもうこの自民党の選挙でした。今から考えると、よくまあこんな選挙をやったもんだと思えますが。

院選挙で新党さきがけの公認として当選いたしました。前回は、小選挙区になって、あえて鳥根二区で竹下登先生に一騎打ちを挑みました。いいところまでいったのですが、中山間地帯の郡部で大量に相手側に貯金されて敗れたわけですね。

その地域に、最近私の支援グループが誕生いたしました。ところがそのグループに対して、会社に朝から電話がなりっぱなしとか、お前の所は倒産するぞうだという噂を流されたり、そのグループに入っている建設業者には砂を売らないということをや業界が決議しようとして、良識ある支部長がそれをとめたというようになことも行なわれております。これが田舎の政治の現実です。

私自身としては、そういうことを一つ一つクリアしていくために、いったいどのような政治スタイルを取るべきなのかということに悩まながら、組織作りを励んでいるところであります。

私の場合は、言葉と行動を限りなく近づけることが必要ではないかという信念を持ってまいりました。今の日本の政治で政治家、政党がなぜ信頼されないのかといえば、それは言葉の問題ではない。言葉も語れない政治家もいるやに聞いておられますが、それは論外として、問題は言葉で言った通りに行動できるのか、その言葉の通りに戦って見せることができるのかどうか非常に大切だと思っております。そういう意味で、私なりに言葉通りに行動を続けてきたつもりであります。

国民は政治家の職責を尊敬すべし

橋爪 四人の政治家のお話を伺って、日本の未来も捨てたものではないなと、ちよつと嬉しく思っております。

ただ残念なことに日本の政治風土では、あまり政治に価値を置かない。むしろ軽蔑し、敬遠して、自分とは関係ないことと考へたがる。同時に政治家に対する軽蔑もかなり広がってきたと見て、有権者にすれば政治家の悪口を言

い、軽蔑しさえすれば、何か政治が良くなるかのような錯覚を持っているんですが、これは大きな勘違いであると私は思っています。

むしろ今必要なことは、政治家の職責に対する尊敬の念を私たちがしっかり抱いて一人一人に対する尊敬ではないですよ、政治家が行なう職責、仕事に対する尊敬の念ですけれども、その基準に照し

◆パネラー紹介◆

- 東 祥三 衆院議員 自由党副幹事長
- 枝野幸男 衆院議員 民主党政策調査筆頭副会長
- 田中 甲 衆院議員 民主党国民運動本部長代理
- 中村敦夫 参院議員
- 錦織 淳 前衆院議員・首相補佐
- コメンテーター
- 橋爪大三郎 東京工業大学教授
- 石津美知子 民主統一同盟事務局長

6面から続く

て厳しく政治家を選び、政治家を育てていくという積極的な態度ではないかと思

次は政治家の皆さんというのは、今のお話を聞いていても、大変にカッコいい。それはなぜか。落選するからだと思

では政治とは何か。私が考えるのに、皆を拘束するようなことを決めること、これが政治だと思います。例えば税金を

民主主義の原則は多数者が決定する権限を持つわけですから、政治をやらうと思えばどうしても多数者を獲得しな

ではないかと思えます。

ですから政治が妥協だというのは正しいんですけども、それは現象論で、永田町にそれしかないとするば、結局何が悪いかというと、有権者が国会で自分の意志が反映されているかどうかという

政党文明を日本社会に確立するために、政治家・政党と有権者とのあり方を問う

錦織 われわれは自民党政治を批判してきた。しかしよく考えてみるとその批判はもう一度、自分の上に落ちてくる

か、私は最近思うように思うようになりませんでした。二十一世紀の国家ビジョン、社会のあり方について考えることが政党の大

高度成長のもとに官僚組織が発達し、その中で政治的機能というものが利益分配に矮小化してしまっただけで、その間に政治そのものが、老衰寸前までおちこんで

田中 私は今、議員立法の活動に力を注いでいます。

政治家というのは党務、政務、選挙活動、この三つができて一人前の政治家だということ、自民党時代にずいぶん

野党ですから成立しない、つまり議員立

を通じて実現していききたい社会のイメージが重なっていると。個人個人の自立した選択によって票をいだけ、それが多数になる、この構造が選挙区にあるわけ

法をだしたというよりもよりがりで終わってしまふ。それではいけないので、議員連盟をつくり、超党派の活動ということをやっています。

市民団体、NPOやNGO、こういう方々の声を聞ける活動、そしてそれが世論背景を持つ必要な法案なのかを判断

二つ理由があります。一つは、政党に対する修練度というものが日本にはありません。市民が政治から距離をおいて

今、この段階で政党に、例えば民主党に入党していただける方の数、そしてその

それは民主党に限った問題ではない。国民の多くがどこかの政党の党員になり、その党の意志決定に影響を持つと

ろうと思っています。

いうような裾野を持った時に初めて、草の根組織を足場に政治が政治をリードしていく状況になるのではないかと。もう一点、今の日本の政党はまだまだ

東 橋爪先生の言われた、政治家の職責というのは重要なことだと思います。短絡的に申し上げると、僕は政治家とい

後、何人いるかわからないほど一ラインに戻っているわけです。どこの国にも、こういうことはまず起こっていない。なぜ日本においては、そういうことが起こっているのか。仕事をしないという

僕の場合は極めて明確で、日本は平和、平和と言っているが、何もしていない。口だけ、お金だけです。これでは世界の中で尊敬されない。外国の人とい

日本は二十四万の軍隊組織を持っておりながら、これをいざという時にどのように動かしたらいいかというところが一切、法律には書かれていない。

そういう国に残念ながらわれわれがいるということ、どれだけ多くの皆さん方と認識することができているのか。そしてそういう問題に対して、どれだけ日本の政治を動かしていくことができるのか。これが僕は今後の最大のポイントだ

ろうと思っています。

中村 遅れてきてすみません。中村敦夫です。参院選挙での私の公約はたった一つ、新党を作ることでした。日本の政党政治がなぜ全然機能していないのか。政党というものがバックの団体によって成り立っているという、日本の政党の在り方に問題がある。結局は選挙で勝たなければいけないことで、団体や組織に頼っていかざるを得ない。

政治の役割、政治家の役割は、誰よりも鋭く未来を洞察することだと思

このスタイルは、明治維新以来の歴史的問題でもある。明治以来、政治というものは本当の意味でこの国に存在したのかどうか。政治家というものが本

私は、明治維新に代わる大きな政治的季節がもう一度やってきたと思

2面へ続く

だというように時代認識を持っています。

総選挙―改革派の総結集構造への道のりと、有権者に問われる覚悟

東 改革というのは現状の仕組みを変えることで、変えるという聞こえがいいんですが、破壊するということです。そこから新しい枠組みをどのように作り出すのか。ですから、今までのありようがいと思うならば、どうぞ自民党に投票してください。そうでなければ私たちがなんではないんですか。

グランドデザインを書いている政党がないというお話でしたが、僕らはもうすでに書いてあるわけです（日本再興へのシナリオ）。こういうものを全ての政党が出し、そして皆様方が読んで政党を選んでいくというふうになれば、新しい時代が始まっていくんじゃないか。本当に志をもって、日本の社会をこう変えていくという人たちが、皆さん方にだけだけ応援していただけるか、そういう問題です。

そのメルクマールは何かと言えば、今でも過半数の方々は何かなるだろうと思っている。僕は絶対に、なんとかならないと申し上げているわけです。

今の状況に満足している、あるいはなんとかなるだろうと思う人は自民党、そうでない人たちは別の党ということですよ。そしてその政党や政治家が何を考えているのか、本当に政策遂行能力があるのか、政策提言能力があるのかというのを、皆様方に調べていただく。唯一の力は皆さんの一票一票なんだから、それによって必ず変えられる、その認識を持つか持たないかというのが最大のポイントなんだろうと思います。

枝野 次の選挙で大きく変えられるかどうか、わたしは必ずしも確信はもっていません。

そして日本社会全体に、本当にこのままではだめなんだという危機感があるかといえば、それは私たちの皆さんに対する説得が不十分であるということも含めてまだまだ、日本社会全体の空気がそ

こまでになっているとは必ずしも思っていない。

しかし東先生のお話の通り、事態は急速に危機的な状況、がけつおちまで迫り込まれていると思っています。政治の側面だけではなく、日本人に残されている時間はそんなに多くはないだろう。マーケットや経済状況が、日本人に対して政治家に対しても、それを余儀なくされるまで、もしかすると次の総選挙前にも追い込んでいくのではないかと。少なくともその時に、それに応えるだけの準備はできているという自信は私自身は、あるいは私たちはもっているというのが、現状で申し上げられることだと思っています。

田中 次の選挙は政権交代のリアリティがあるかどうか、そのことを有権者の皆さんに示すことができるかどうかの選挙になると思います。つまり自民党、共産党と、もう一つのポジションをきつと選挙協力をしながらおさえていくことができるかどうか。

それと私は、この総選挙を機会に、地方の政治を変えていくし、かけを同時に組まなければいけないと思っています。地方議会の会派の色合を変えていくとか、あるいは知事選挙や首長選挙の流れを変えていく。そのことも考えながら対応していきたいと思っています。

錦織 次の衆議院総選挙は政権交代をめぐる選挙にしていかなければならない。と同時に、そうならざるをえないという面がある。つまり数十年にわたる日本の政党政治の衰弱のつげが、自民党の自己崩

壊というかつこうで表れているわけで、そうすると破綻銀行じゃないけれども、受け皿政権を作らざるをえない。もう少し自民党で頑張ってやってくれ、その間にこちらも腕を磨くからというような話ではない。そういう意味で、非常に難しい局面に今立っている。社会全体から、英知を結集していくような、そういう政権を作っていくかどうか、それが次の選挙の大きな課題だと思います。

●コメント

橋爪 次の選挙のことですが、自民党は案外しぶといと思います。一番ありそうなのが、共産党がある程度をとって、自民党は過半数にとどかないかもしれない。このケースで話をしましょう。後は改革派の横並び。

そうしたときに、自民党はそのままでは政権をとれない。考えることは民主党とくんで菅直人さんを首相にという、村山政権と同じことが起こるわけです。ここで食うか食われるかの戦いが起こる。自民党というのは改革をやりたくて連立を組むのではなくて、当面政権を維持したいからくむんです。

だから社民党の二の舞をしてはいけません。それだけの長期的な性根が、民主党でもどこでもいいですが、その改革派政党にあるかどうか。逆に自民党を壊していくような戦略、戦術をもって次の政権、次の国会を乗り切るかどうか。むしろ次の選挙が一番大事だということに私は思います。

地球益・国益・郷土愛をむすびつける

がんばろう！日本！！ 10・10シンポジウム

● 報告集 ●
11月中旬発刊(予定)



- ◆10・10シンポジウム
 - 第一部・「国家衰亡の危機、政党と主権者はどうあるべきか」
 - 第二部・「抜本的改革の政党とその支持基盤を、どこからどのようにつくっていくのか」
 - ◆シンポジウムをいかに受け取り、なにをなすべきか/他
- 予価・1000円